

## メンミにおけるアラブ＝ユダヤ共生言説批判（Ⅱ） ージンミー身分への照準ー

田 所 光 男

### （Ⅰ）の目次

はじめに

- 1 小説におけるアラブ＝ユダヤの幸福な情景
- 2 アラブ＝ユダヤ共生言説の担い手
- 3 ショアーの中心化の中で
- 4 ヨーロッパ左派の相対化

### 5 カダフィ大佐とのシンポジウム

先立つ二つの章では、アラブ＝ユダヤ共生言説を担うヨーロッパ側の主体について検討したが、本章では、この「神話」の成功の第一の要因としてメンミが挙げた「アラブのプロパガンダ」(*Juifs et Arabes* 56) という方向を探ってみたい。メンミがこの要因に対処する必要性を強く意識するようになったのは、あるシンポジウムに参加したことがきっかけとなっている。

1973年11月24日、西欧諸国の有力新聞、フランスの『ル・モンド』、イタリアの『ラ・スタンプ』、イギリスの『ザ・タイムズ』、ドイツの『ディ・ヴェルト』は、リビアのカダフィ大佐を招いて、知識人・政治家と対話するというシンポジウムをパリで開催した<sup>1</sup>。『ル・モンド』は、「イスラムの普遍主義とユダヤ人の運命、この二つの主要テーマが議論された」という大見出しを掲げ、一頁全面を使って詳細にこのシンポジウムの内容を報じている。タイトルだけを見ると学術的なシンポジウムとの印象を受けるが、記事を読むと現実の国際情勢をめぐって激しいやりとりが行われたことがわかる。それも当然のことで、この時期は第四次中東戦争が戦われた直後であり、カダフィ大佐はイスラエルとの休戦にも講和にも反対していた軍人国家元首である（Kadhafi, Interview, 18–19 novembre 1973）。

まずコレージュ・ド・フランスのジャック・ベルク〔イスラム学〕とロジェ・ガロディ〔後の改宗ムスリムで、ショアー否定論者〕の質問に導かれて、カダフィ大佐は、自民族だけに閉じたユダヤ教に対し、「人間を人種や色で何ら区別しない」イスラムの普遍主義

を強調する。こうした対比は学問世界でもなされることがあるが、それは決してニュートラルな説明ではなく<sup>2</sup>、もちろんここでもカダフィ大佐はユダヤ教を貶める意図で発言していよう。実際、この挑発的言辞に反応したのは、他ならぬメンミである。それまでのイスラムびいきの二人とは異なり、シンポジウムはここから対決の場となる。メンミは、「かつてユダヤ教に改宗した家系に連なるユダヤ系ベルベル人」と自己紹介して<sup>3</sup>、カダフィ大佐に挑みかかる。記事を読んでみよう。

[メンミ] 氏は大佐に次のように尋ねる。「領土の返還や国境の修正を議論するためではなく、イスラエルの完全消滅までの戦いを再開しに来たのであると、あなたが言ったのは本当でしょうか。なぜユダヤ人には国家への権利がないのでしょうか。パレスチナに住むヨーロッパ出身のユダヤ人は、ヨーロッパに送り返されなければならないとあなたが表明したというのは本当でしょうか。[中略] アラブ諸国に生まれたユダヤ人は、かつて略奪や虐殺を受けた国に戻ることができるでしょうか。」この点ついてさらにメンミ氏は、ユダヤ人がアラブ人と常に平和に生きてきたというのは正しいであろうかと問いかける。氏は、1907年のモロッコ（カサブランカ）から1946年（アデン）や1948年（エジプト）に至るまで、数多くのユダヤ人差別と迫害の事例を挙げる。

この記事の後半部からはっきりするように、メンミはカダフィ大佐に、まさしくアラブ＝ユダヤ共生の真偽を問いかけている。これに対し大佐は、自分はユダヤ人に対する一切の抑圧に反対するが、1948年のデイル・ヤシン村〔パレスチナ〕事件などユダヤ人によるアラブ人虐殺などの暴挙がまずあって、それに対してアラブ人が反応したのであり、両者の間の不和に責任があるのはユダヤ人の方なのだと反論する。さらに、イスラエル国家あるいはシオニズムばかりではなくユダヤ教それ自体の背後に「新しい十字軍」が存在すると主張し、リビアをはじめすべてのアラブ諸国が、戻りたいユダヤ人を受け入れるようカダフィ大佐は提案する。しかし、メンミはこのような提案には全く耳を貸さず、「アラブ諸国におけるユダヤ人の牧歌的な生活についての「伝説」」を槍玉にあげ、ユダヤ人はずっと「隷従」の地位に置かれてきたと、再びカダフィ大佐のアラブ＝ユダヤ共生神話を攻撃する。

カダフィ大佐はメンミの繰り返しの質問にもかかわらず、最後までアラブ＝ユダヤ共生言説を直接に唱えることはなかった<sup>4</sup>。しかし、メンミは決して邪推しているわけではなく、第四次中東戦争の直後、カダフィ大佐は『ル・モンド』のインタビューで、次のように述べている。

私にとって本質的なことは1967年にイスラエルが征服した領土を取り戻すことではなく、パレスチナ人を、すべてのパレスチナ人を、シオニストのくびきから解放することです。私が戦争に参加するとすれば、その戦争の目的が篡奪者を追い払うこと、1948年以降アラブの土地を植民地化しにやってきたあのヨーロッパのユダヤ人たちを彼らのところへ追い返すことにある場合だけです。アラブ系ユダヤ人に関して言えば、彼らは我々のいとこであり兄弟であって、彼らは何世紀にもわたってそうであったように、我々のもとで今後も平和に暮らせるでしょう。（Kadhafi, Interview, 23 octobre 1973）

ユダヤ人は「アラブの土地」ですずっと平和に暮らしてきたという言説は、その伝統的共生はヨーロッパのユダヤ人の間に生じたシオニズムによって破壊されてしまったという言説と連動している。この複合言説が「アラブのプロパガンダ」の基本構造を成している。

しかし、これは決してカダフィ大佐の発明品ではない。すでにイスラエル建国前夜の1946年、当時なおフランスの植民地下にあったマグレブ諸国のナショナリズム政党の党首たちは、チュニジアのブルギバを中心にしてカイロに集まり、米英のパレスチナ問題調査委員会に覚書を送り、その中で、「地上で最も歓待心に富み、最も寛容な民族、かつてユダヤ人を迫害したことがなく、それどころか迫害されたユダヤ人に常に避難所や保護、配慮を提供してきた〔アラブ〕民族の間に反ユダヤ主義の芽を導入した」のは、他ならぬユダヤ人自身であると述べ、「シオニストのプロパガンダ」を批判しているのである（Abitbol 444－445）。

## 6 直接の記憶、そしてジンミー制度へ

『ユダヤ人とアラブ人』には、時間の関係で全部は読まれなかったが、シンポジウムのためにあらかじめ用意されたテキストが全文（「カダフィ大佐への質問」）と、シンポジウム後に『アルシュ』の求めに応じて書かれた文章（「アラブ系ユダヤ人とは何か」）が収録されている。それを読むと、メンミがカダフィ大佐にぶつけようとした質問の全貌、とりわけ、そのアラブ＝ユダヤ共生言説への批判の方法がはっきりする。20世紀のアラブ諸国におけるユダヤ人迫害の事例は、『ル・モンド』の記事ではわずか一文にまとめられていたが、質問原稿では、アラブ世界でのユダヤ人の不遇を示す重要な論拠としてほぼ一頁にわたって詳細に挙げられている（*Juifs et Arabes* 62）。しかし、メンミは別の論拠も用意していた。アラブ諸国のローカル紙などから採ったという数多くの迫害事例に続いて、次のように家族や自分の直接経験を語っている。

私の祖父や父は、通りがかりのアラブ人なら誰でも彼らの頭をたたくことができた恐怖を忘れてはいませんでした。私自身子供の時、アラブ人の町の路地で遊びました。恐らく大統領もそうでしょう。その頃、あなたが若いユダヤ人のことをどう思い、どう取り扱っていたか覚えていらっしゃるでしょうか。残念なことに、私はそれをあまりによく覚えているのです。(63)

シンポジウムで実際にメンミがこうした言葉をカダフィ大佐にぶつけたのかどうかは不明であるが、いずれにしても、アラブ諸国におけるアラブ＝ユダヤ関係についてメンミが呼び覚まそうとした共通の記憶は、殺戮、略奪、強姦、誘拐、焼き討ちなど、ポグロムについて通常言及される迫害内容ではない。エンリコ・マシアスは、1934年アルジェリアのコンスタンチヌで起こった反ユダヤ暴動によって母が精神的に深い傷を負ってしまったことを語っているが<sup>5</sup> (Macias 31-34)、メンミが上で喚起するのはそのような「悲劇」の記憶ではない。被害の程度ということであれば、どうということもないような、「恐怖」の記憶である。しかしこの「恐怖」の期間は長く、その源泉は深い。

二、三の期間を除けば〔中略〕、あの牧歌的生活は決して存在したことはなかった。さらにまた、ユダヤ人は下層民に好きなようにされていたばかりではなく、こうした隷従をいわば正当化する身分をもっていた。この身分のことを私たちはよく知っている。アッバース朝以来、それはウマル憲章の中にある。概括するなら、最良の場合にはユダヤ人は動産の一部を成す犬のように保護されるが、頭を上げたり人間のように振舞ったりするなら、自分の身分を常に覚えておくよう殴り倒されなければならない、というものである。(Juifs et Arabes 63)

メンミは、ユダヤ人を人間以下の存在に貶めるこの「身分」を指す語を挙げてはいないが、言うまでもなくこれはジンミー〔dhimmi〕のことである。反ユダヤ主義の事例として挙げられる虐殺や略奪などは、規模も大きく各地に発生しているが、それでもそれらを偶発的な事件と言い張ることもできよう。それに対し、メンミはこのようにジンミー身分に発する差別を明確に示すことで、ユダヤ人の不幸が、もっと深く、イスラムの社会の伝統的制度に由来すると主張するのである。

カメル・カテブはその『アルジェリアにおけるヨーロッパ人、「原住民」そしてユダヤ人(1830-1962)』において、膨大な資料を駆使して人口動態を検討し、フランス植民勢力がアルジェリアの伝統社会を破壊して行く過程を的確に実証している。確かに歴史過程の大枠の記述はそれで正しいのであろう。しかしユダヤ人について言うと、タイトルに挙げられているにもかかわらず、この浩瀚で詳細な研究書全体を通してほとんど

主題化されてはいないばかりか、その扱い方は不十分だと言わざるをえない。ややまとまった言及がなされる第11章でも、例えば次のように書かれている。

全体として、ムスリム原住民の間には、ユダヤ教徒の同国人に対し軽蔑心や優越感があったが、ヨーロッパ系住民に対してよりもはるかに彼らのほうに親近感を抱いていた（慣例と風習、話し言葉の点で）。ただしそれも、アルジェリアのユダヤ人原住民のフランス化が決定的になる時点までのことである。（Kateb 192）

ムスリムとユダヤ人の関係を記述する上の一節において、カテブの視線はどこに合わされているであろうか。ここでもムスリムの側であり、相手のユダヤ人は全体として、ムスリムについてどういう感情を抱いていたのかは問題にされてはいない。またなゼムスリムがユダヤ人に対し「軽蔑心や優越感」をもっていたのか、その理由についても何ら言及されてはいない。しかし今メンミを介して推測できることは、他ならぬジンミー制度により何世紀にもわたってムスリムの側にこのような感情が養われてしまったのではないか、ムスリムの「軽蔑心や優越感」の反対側にあるのは、まさにメンミが指摘していたユダヤ人の「恐怖」なのではないか、ということである。そしてその点をはっきりさせてみれば、カテブが言及している、ユダヤ人の「フランス化」も、植民勢力フランスの引力による単純な離反なのではなく、旧支配者アラブへの拒絶という要因もそこでは大きな役割を果たしているかもしれない、という複合的理解が可能になる。実際、前稿でもすでに引用したように、メンミは次のように述べている。

アラブ人は被植民者であった、それは確かである。しかしそれでは我々はどうだったのか！ 何世紀にもわたり、支配され、侮辱され、脅かされ、周期的に虐殺されること以外のことがあったであろうか。そして誰にそうした仕打ちを受けてきたのか。これについて我々の言葉を聞く時ではないだろうか、ムスリム系アラブ人によってなのである！ [中略] しかも、大部分のユダヤ系知識人が政治倫理によって断罪する、フランス、イギリス、イタリアの植民地化は、我々ユダヤ大衆にとっては、生存を保障してくれるものと実感されてきたのである。（*Juifs et Arabes* 12）

北アフリカの現代史を語る時に往々にしてしまうことは、フランスによる侵略、とりわけ1830年からのアルジェリアの征服に歴史の起点をとることである。しかし、言うまでもなく、フランスが北アフリカに侵攻した時、そこに存在したのはムスリムだけの桃源郷ではない。歴史を通じていくつもの外来勢力が到来して攻防を繰り返し、民族的にも複雑な土壌が形成されてきた。そして19世紀以降、この多様な住民は、フランスの植

民体制を同じように生きたわけではなかった。アラブ人にとっては「大災難」であったものの、ユダヤ人は「一種の解放」と感じた (*Juifs et Arabes* 70)。メンミは、この違いをもたらした根本条件こそ、イスラムに固有のジンミー制度であると考えてるのである。

## 7 「イスラーム共同体」とジンミー

イスラム世界における異宗教の取り扱いが問題になる場合、ジンミー身分は、ユダヤ教徒やキリスト教徒、ゾロアスター教徒などの一神教徒が「啓典の民」として受けた特別待遇として、必ずと言ってよいほど強調される論点である。例えば、井筒俊彦『イスラーム文化』は次のように説明している。

この「啓典の民」という概念の特徴は、イスラーム教徒ではなくとも、「啓典の民」として認められさえすれば立派にイスラーム共同体の内的構成員、構成要素でありうるということです。[中略] 無論、その位置はイスラーム教徒よりも低くて、「被保護民」(dhimmi) という従属的なものです。そのしるしとして特別の税金も課されます。ついですが、その税金が経済的にはイスラーム教徒の主な財源となったのでありますが、とにかく重い税を払わされる。これが、「被保護者」たちにとってはかなり屈辱的だったらしいのですが、しかし、その代わり、生命財産は完全に保護され、平和が保障されます。あまり目立ったことをしない限り [中略]、それぞれ自分の宗教を守り、自分独特の典礼形式で神を祀ることを許される。[中略] 要するにイスラーム共同体というものは、単にイスラーム教徒だけでできている共同体ではなくて、イスラーム教徒がいちばん上に立ち、その下に複数のイスラーム以外の宗教共同体を含みながら、一つの統一体として機能する大きな「啓典の民」の多層的構造体なのであります。(127-128)

それ以前の、血縁に基づく部族的な社会構成とは異なる「イスラーム共同体」、その新しい普遍性、平等性、契約性を象徴する重要な契機がジンミー制度である。ジンミーはイスラーム教徒ではないが「立派に [中略] 内的構成員」として編入されている。ジンミー身分の付与こそが、アラブ世界における開かれた「共同」性の基礎なのである。

イスラム学者によるこうした解説を、これまで検討してきたメンミによる批判と取り組ませてみると、まず、ジンミー身分に照準を合わせたメンミの批判は、相手にとってどうしてもよい論点に攻め込んだのではなく、相手の核心に切り込んだ批判である、と言える。そして、両者の溝が決定的に大きいことも否定しようがなく明らかである。確かに井筒はジンミー身分に置かれた人々の「屈辱」感にも一応の配慮を示していて、視線



の相対性、記述の中立性が尊重されているように見える。しかし、その「屈辱」感も、重税という経済的要因に起因するように書かれ、すでに見たようにメンミが人格的な、あるいは存在的な差別を問題にしていたこととの違いは明らかである。さらにまた、メンミの示す共生言説批判の視点からはもちろんであるが、井筒が説明する言葉それ自体に従っても、「多層構造」とは、「いちばん上に立 [つ]」イスラム教徒とそれに「従属」するジンミーから成る、上下の差別構造である。言い換えれば、その「共同体」とは古代ポリスにおける市民と奴隷の二分界のように、特権者が全体として従属集団の上に載っている。それにもかかわらず、劣等な位置におかれているマイノリティ集団を、「立派にイスラーム共同体の構成員」だとするのは、多数派イデオロギーをあまりに無批判的に受け入れてはいないであろうか<sup>6</sup>。

## 8 北アフリカのアラブ＝ユダヤ共生言説とジンミー

第二次インティファダ以降、北アフリカの国々でも反ユダヤ主義的動きが急速に高まり、2002年4月11日にはチュニジアのジェルバ島のシナゴーグがテロ攻撃を受けることなども起こった。そうした中、雑誌『若いアフリカ / 知性人』はマグレブのユダヤ人の現状をさぐるルポルタージュを連載し、その企画の冒頭フランソワ・スーダンは、「モロッコとチュニジアにおけるユダヤ人編入の、あまりにしばしば描かれる牧歌的な画像」と現実の乖離を示唆して、まさしくアラブ＝ユダヤ共生言説の真偽を検討することを連載の課題の一つに掲げた<sup>7</sup>。

このうち取り上げたいのは、チュニジアのユダヤ人に関する、ファウジア・ズアリの「水の中の魚のように」である。このタイトルが象徴的に示しているように、この記事は一貫して、アラブ人とユダヤ人はチュニジアですずっと平和的に共存してきたと主張する。ズアリは、北アフリカに侵入した数多くの勢力について、「ローマによる征服」、「ヴァンダルによる支配」、「ビザンチン帝国による再征服」、さらには「フランスによる植民地化」というように、それらの抑圧性を明確に取り出すが、7世紀の外來勢力だけは特別化し、「イスラムの到来 (arrivée)」と呼んでいる。イスラムは、キリスト教体制下で差別に苦しんでいたユダヤ人を「そのくびきから解放」したのであり、そしてその「解放」の方策が、他ならぬジンミー身分の付与であったと断言する。ユダヤ人はこの身分のおかげで自分たちの宗教を維持し、また経済的にも上昇することができた。不幸な事態もないわけではなかったが、全体としてみれば、ジンミー制度に基づく共生こそが、チュニジアにおけるアラブ人とユダヤ人の関係の常態であったという報告になっている。そして、こうしたアラブ＝ユダヤの伝統的な共生関係を破壊したのは、ズアリによれば、フランスの植民地主義とシオニズムである (Zouari 21-22)。すでに見た1940年代のブ

ルギバラマグレブのナショナリスト指導者や、70年代のカダフィ大佐と同じ見解である。

ところで、このルポルタージュにはいくつかの囲み記事が付されている。ズアリ自身の書いた「著名なディアスポラ」にはチュニジア出身の数多くのユダヤ人が紹介されているが、その中でただ二人だけ写真が掲載されている。パリのよく知られた安売り服飾品店タチの社長ファビアン・ウアキと、「作家アルベール・メンミ」の肖像である。屋根屋根の重なるパリの町を背景に、メンミはパイプを手にこちらを向いている。メンミの写真が選ばれたことには、客観的であろうと努めたズアリのジャーナリストとしての良心を見るべきなのか。それはいずれにしても、チュニジア出身のユダヤ人としてメンミが語るアラブ人社会での「恐怖」やそのジンミー批判など、メンミの思想内容のほうには完全に無視されている。自説を表明できているのは、別の囲み記事になるが、チュニジアのユダヤ人諸団体連合会長ガブリエル・カブラである。「イスラエルの建国以来、ユダヤ教はイスラムと両立できなくなったような印象をもたれています。しかしユダヤ教はイスラムの傍らでずっと平和に生きてきました」(Zouari 22) と、ずばりアラブ＝ユダヤ共生言説を語って、ズアリの本文を補完するものとなっている。

またズアリは、祖国チュニジアを望郷したアンドレ・ナユム André Nahum の近著『流浪の木の葉』を書評する記事の中で、この著作が「いくつかの歴史的真理を忘れている」として、ジンミー身分についてこう説明している。

歴史上はじめてのマイノリティ保護協約（ジンミーは「神の栄光の下に保護された」という意味であり、ムスリム権力は神の前においてこうしたマイノリティに責任がある）(Zouari, «Nostalgie de la Tunisie ancienne»)

ムスリム系アラブ人はこうした親切的ジンミー身分を付与することで何世紀にもわたりユダヤ人を保護してきたのに、ユダヤ人はいったいどんな具体的な脅威を感じて出て行ったのか。ズアリはこう不満を表明している。ズアリが意識しているのかどうかかわからないが、ここの説明を読むと、マイノリティという語のもつ二重の意味を考えさせられる。すなわち、少数集団（マイノリティ）ユダヤ人は一人前ではなく、責任主体とはみなされず、後見人の必要な存在（マイノリティ）なのである。著者のナユムはズアリのこうした書評に反論し、ユダヤ人はアラブ人に先立ってチュニジアに存在したことに言及しつつ、将来を考えるのなら過去を隈なく解明しなければならないと述べて、両者の対立は、30年以上前の、メンミとカダフィ大佐の対立を髣髴とさせるものになっている（Nahum «Juifs tunisiens : faire la lumière»）。



## 9 ジンミー制度と近代の理念との対立

これまで見てきたように、ジンミー制度をめぐる二つの見解が対立している。一方はこれを共同性の根底とみなし、他方は差別の源泉と考える。さらにこの対立は、7世紀におけるアラブの侵攻と19世紀におけるフランスの侵攻をどうとらえるか、という対立とも結びつき、二つの歴史認識の溝は深い。ジンミー制度はイスラムの根幹に関わり、その最終的な典拠は『コーラン』に求められる以上<sup>8</sup>、原理主義者でなくとも簡単には譲れぬところであろう。しかし、この問題は一見そう見えるのとは異なり、イスラム教対ユダヤ教という宗教的次元の対立ではない。少なくともジンミー制度を批判し、拒否するユダヤ人は、別の次元でそうした主張を行っている。

ズアリは、前掲の記事の中で、チュニジアのユダヤ人をフランス人に仕立て直そうとしたアリアンス・イスラエリット・ユニヴェルセルを批判的に取り上げている（Zouari 22）。実際、モアチの『チュニスの麗人』の中でも、パリに本部を置くこのユダヤ人組織の学校で教育を受けたユダヤ人の若者は次のように決意する。

ドイツが宣戦布告したのをご存知ですか。私は行きます。私にはフランス人である幸運があります、私の国、ジョーレスと人間の権利の国を救うために志願します。（Moati 215）

こうした若者は、植民者の言説にたぶらかされた哀れな原住民なのか。しかしここで注目したいのは、フランスがユダヤ人の若者にどのように立ち現れているかということ、つまり、「ジョーレスと人間の権利の国」として表象されていることである。このフランス表象がフランス社会の実相や、その植民地主義とどのような関係にあるのかの問題はひとまずおいて、まず何よりも、これが北アフリカのユダヤ人を魅惑していたことを認識する必要がある。そして、こういう「フランス」と伝来のジンミー制度を同じ天秤にかけるとどういうことになるであろうか。確かに、「信仰の自由」や「生命財産の安全」を異教徒に保障するジンミー制度の創設は、改宗の強制や殺戮、追放とは比較にならない偉業であったであろう（Hennion 41）。しかし、19世紀以降、フランス革命の掲げた理念と比べられたとき、それらはなお重みを誇れたのであろうか。同じことは、ユダヤ社会にも言える。19世紀半ば、アルジェの大ラビであったミシェル・アーロン・ヴェイユは、アルジェリアのユダヤ人の状況についてまとめた報告書の中で、フランスによる「征服」以前のユダヤ人社会についてかなり詳しく説明しているが、例えば、そのヒエラルキーの頂点をなすモクデム [Mokdem] と呼ばれる地位を占める人が「イスラエリット住民に行使する権力は [中略]、レジャンス [オスマン帝国に従属するムスリム国家

であるが、ほぼ独立していた]の首長の権力と同じ性質のものであり、絶対的で、専制的で、無制御であった」と指摘している（Schwarzfuchs 300）。つまりユダヤ社会それ自体がいわば小さな専制君主体制となっていた。もちろん20世紀にはすでにかなり変化を遂げていたが、それでもチュニスのアリアンス・イスラエリット・ユニヴェルセルの学校に通うメンミのような若者には、父やラビなど伝統的権威は耐え難いものであった。『動かぬ放浪民』の中で回顧されているように、メンミは、狭いユダヤ社会の中で何世紀にもわたって受け継がれてきたパトンを両親から引き継がなければならない、その務めを拒絶したのであった（*Le nomade immobile* 57-58）。そしてそういうメンミの反抗を導いていたのは、他ならぬ、「モンテーニュ、ヴォルテール、ルソー、人間の権利のフランス」であった（*Le nomade immobile* 65）。この「フランス」を前に、イスラムの体制も、それに組み込まれたユダヤ社会も、とりわけ、ズアリが説明するような、ユダヤ人を一人前の責任主体とは見なさないジンミー制度などの諸伝統は、いったいどれだけ意味をもち続けることができたのであろうか。北アフリカでなぜユダヤ人が急速にフランスに接近したのか理解するには、この点の理解が不可欠である。

アラブ＝ユダヤ共生言説は、前稿で検討したように、キリスト教世界におけるユダヤ人の不幸という言説を伴っていた。そしてそのような対立構図を前提にすれば、わざわざヨーロッパに不幸になりに行ったユダヤ人は愚かに見えてしまう。しかしそういう宗教的次元での問題設定それ自体が正しくない。マグレブを拒否したユダヤ人を魅惑していたのは、非宗教化の道に踏み込んだ西欧である。だからこそ、チュニジアのユダヤ人を対独戦争に志願させたフランス革命の同じ理念が、キリスト教のポーランドではユダヤ人にその故郷を棄せさせたのである（田所 105-106）。

しかし、そのポーランドのユダヤ人がフランスに辿り着いて、そこの現実に落胆したように、メンミも実際にフランスに来て、「もう一つのフランス」を、「教権的で反動的な、愚鈍で下種な」フランスを回避できなくなる（*Le nomade immobile* 65）。メンミが最初の小説『塩の柱』の中で、主人公アレクサンドル・モルデカイ・ペニルーシュに、最後フランスへの道を選ばせなかったのには、やはりその経験が大きく働いている。

私はかつてオリエントを拒絶し、今や西欧は私を拒絶していた。いったい私はどうなるのか。（*La statue de sel* 352-353）。

チュニスのユダヤ人は、こうして行き場を失ってしまったのである。

## 結び－マイノリティという根底条件から

アラブ＝ユダヤ共生言説の強調するように、ユダヤ人はキリスト教世界でのみ迫害され、イスラム世界では常に幸福であったのだとしても、あるいはメンミの批判するように、ユダヤ人はイスラム世界でも同じように差別や迫害を受けてきたのだとしても、いずれにしても、イスラム学者バーナード・ルイスが指摘するように、ユダヤ人は、ただこの二つの後発の一神教世界でのみ、活発な活動を持続させてきたことは否定できない事実であり、これ以外の文明圏ではどれほど寛容を享受しても、さほどの飛躍は認められなかった（Lewis 11）。こうした面からこの両世界におけるユダヤ人のあり方の特長について比較検討することは、複数文化の生産的な共生を考える上で意義のある貢献をなしうるのである。

それに対しメンミは、アラブ＝ユダヤ共生言説を批判することを通して、どこに向かおうとするのか。両者の共生の絶対的な不可能性を主張しようとするのであろうか。あるいはまた、西欧の植民地支配の、正当性ではないとしても、それがもった解放者としての側面を被植民者として証言した以上、やはり西欧寄りのところで同化を勧めるのであろうか。メンミの批判を検討してみると、確かにこのどちらも方向性としては含まれていると思う。しかし、メンミの議論の主流は別の方向に向かっている。メンミは、ジンミーとしての安全と神殺し故の迫害という白黒の単純な二分界をこわすことで、アラブ世界のユダヤ人とヨーロッパのユダヤ人の状況を貫通する根底的条件を取り出すのである。

本当のところは、反ユダヤ主義を生み出すのはただ単にキリスト教なのではなく、キリスト教界であれイスラム教界であれユダヤ人がマイノリティであるという事実なのである。（*Juifs et Arabes* 57）

アラブ人が多数を占めるチュニジアで、フランスによる植民地支配下、ユダヤ人被植民者であったメンミは、フランスからの独立闘争に積極的に働いた。チュニジアのユダヤ人社会の中では、アラブ人との共闘を選択した数少ない一人である。しかしそれにもかかわらず、新興チュニジアが「イスラム教のアラブ国家」（*Juifs et Arabes* 71）へと傾斜して行く過程で排除されてしまった。メンミは、アラブの指導者たちが導くそのような民族再生の試みを非難することはしない。しかし、「ユダヤ人被植民者は、例えばアラブ主義やイスラムの名においてどうやって自己回復できるのであろうか」と問う（71）。こうしてメンミは、ユダヤ人がそのマイノリティという根底的条件を克服するには、ユダヤ人自身の民族国家を建設するしかない、という方向を肯定するに至る。

シオニズムは、ユダヤ人の抑圧に終止符を打たなければならない運動以外の何ものでもなかった。(Juifs et Arabes 145)

そうであるからこそ、アラブ諸国のユダヤ人の若者たちはショアー以前にシオニストになったのであり、「イスラエル国家は、アウシュヴィッツの帰結ではなく、アラブ諸国を含めて、ユダヤ人の状況全体の帰結なのである」(Juifs et Arabes 64)。アラブ＝ユダヤ共生言説が、すでに見たように、シオニズムやイスラエル国家の存立を否認しようとする言説と連動していたのとは対照的に、それを批判するメンミは、そうすることで、イスラエル国家が存在する権利を肯定するのである。

しかし、メンミは民族解放闘争の達成する民族国家それ自体を最終目的と考えているわけではない。この方向での検討は本稿の主題を越えるが、最後に少しかけておくなら、メンミは生涯を回想する形式をとった『動かぬ放浪民』の中で次のように書いている。

今後、私たちの挑戦とは、[中略] 私たちの様々な特殊性を和解させるに至ることであり、これが真の普遍性の条件である。[中略] 人間たちをその差異にもかかわらず集めることは容易ではないので、何らかの共通な分母について理解し合うことが必要であろう。私は、宗教やナショナリズムを基盤にしてはそれに達することはできないと確信している。それらは本質的に分離させる。自己や集団の自己から距離をとらず、アイロニーももたず、そこに加盟することは、他者の拒否と不公正に容易につながってしまう。各自が自分自身の神話から目覚めなければならないだろう。神聖と言われるテキストは、トーラーも福音書もコーランも、歴史のくれた貴重な贈り物であったが今や邪魔物になってしまったのである。(Le nomade immobile 166)

宗教やナショナリズムが激しく相克する状況の中を生きて、メンミは、そのどちらも役割を果たし終えたので舞台を去るべきだと考えるのである。そしてこの考えは、地球上の各地で民族解放戦争が展開していた時期盛んに読まれた『植民者の肖像・被植民者の肖像』におけるメンミの結論でもあった。対他的な解放である「反抗」に留まらず、それを乗り越える、「革命」という次元に期待をかけ、自分の所属する民族や宗教からさえも自由になるべき方向をメンミは示唆していたのである (Portrait du colonisé 162-164)。

## 注

1. 後述する発言者以外に、ピエール・マンデス・フランスなどの政治家、マクシム・ロダンソンなどの学者がパネリストとして参加している。このシンポジウムについての記述はすべて『ル・モンド』の記事に基づいている（*Le Monde*）。
2. 例えば井筒俊彦は『イスラーム文化』の中で、「民族的に閉ざされた、密閉された」ユダヤ教と、「仏教やキリスト教と同じく一つの開かれた、普遍的、人類的宗教」であるイスラム教という対比を行っている（123－124）。これが何ら価値判断を含まない説明だと主張することは難しいであろう。井筒の説明記述のもつ非中立性については、本稿の注6も参照のこと。
3. こういう自己定義は、北アフリカの先住者をめぐる議論へのメンミの立場をよく表わしている。小説『ファラオ』では、チュニジアのユダヤ人考古学者アルマン・ゴズランは、ここをアラブ固有の土地とみなす言説を斥けて、アラブもフェニキアもゲルマンもフランスも、外から入り込んでこの土地の表面に振りまかれた砂糖のようなもので、「私たちはほとんど皆、あるいはイスラム教にあるいはユダヤ教に改宗したベルベル人なのです」と述べている。狙っているのは、ベルベルの先住性を主張することというよりは、北アフリカの住民の混合性を示すことである。ゴズランの言葉に従えば、ここは、「濁ったスープが煮立っている大鍋」であり、それを解釈した同じくユダヤ人の友人マティアスの言葉によれば、「すべての征服者を無差別に自分の腹の上に受け入れて、自分の子供たちが父親のわからない雑種になってしまった娼婦」ということになる（*Le pharaon* 354－355）。
4. しかしこの論点はここでは終わらず、詳細は述べられてはいないが、ジャファ生まれのパレスチナ人アーメド・エル＝ダッジャニ教授が、アラブ諸国におけるユダヤ人の「哀れな運命」についてのメンミの説に異議を唱えたという。
5. この暴動の最中、彼の母の妹は虐殺されている。この暴動については、メンミも用意したテキストの中で言及している。「1934年アルジェリアにおいて、コンスタンチヌの虐殺。死者24人、何十人も重傷者」（*Juifs et Arabes* 62）。
6. 井筒俊彦は、『コーラン』『解説』でも同じように、客観性を欠いた言葉を多用している。メディアに逡巡した後の時期についてこう書いている。「あまりにも見事なマホメットの政治的手腕、意外にもすみやかな回教共同体の成長、それはユダヤ人にとって彼らの経済的地位への危機の到来を意味した。こういう事柄にかけては世界中の誰よりも敏感な彼らは、忽ち危険を嗅ぎつけ、抵抗工作にかかった。しかも、彼ら独特の、狡猾で、執念深いやり方で」（330）。あるいは、「ここで彼らは、いかにもユダヤ人らしい復讐の案をねったのである。それは未だかつて誰も思いつかなかったような大連合軍を組織して」〔後略〕（33－333）〔下線による強調は引用者〕。こういう記述は検証不可能であって、学術的著作にふさわしいと言えるであろうか。
7. メンミは1955年、ベシル・ベン・ヤメッド〔独立後、最初のブルギバ政府の情報大臣に就任〕らとともに、この雑誌の前身『アフリカ行動』（*Afrique-Action*）の創刊に参加し、独立後にチュニジアを離れるまで文化欄の責任者として活動した（Michèle Robequain 220）。これはチュニジア独立戦争へのメンミの積極的な関わりを示すもので、のちに小説『ファラオ』（*Le Pharaon*）の中でも、この間の事情を推測させてくれる場面が何度か描かれている（第1部第7章など）。

この連載記事については、南山大学教授ラウル・ホランド氏にご教示をいただいた。感謝を申し上げたい。

8. 第9章29節に次のように書かれている。「アッラーも最後の日<sup>いやはて</sup>も信じようとせず、アッラーと使徒〔中略〕の禁じたものを禁断とせず、また聖典を頂戴した身でありながら真理<sup>まこと</sup>の宗教を信奉せぬ、そういう人々にたいしては、先方が進んで貢税<sup>こうぜい</sup>〔中略〕を差出し、平身低頭<sup>へいしんていとう</sup>して来るまで、あくまで戦い続けるがよい」(『コーラン (上)』254-255)。

## 引用文献

- Abitbol, Michel. *Le passé d'une discorde. Juifs et Arabes depuis le VIIe siècle*, Perrin, 2003.
- Hennion, Cécile. «Les juifs sur le qui-vive», *Jeune Afrique l'intelligent*, n° 2166, 15-21 juillet 2002.
- Kabla, Gabriel. «Les Tunisiens intolérants? Une aberration», interview, *Jeune Afrique l'intelligent*, n° 2168, 29 juillet - 4 août 2002.
- Kadhafi (Le colonel). Interview, *Le Monde*, 23 octobre 1973.
- . Interview, *Le Monde*, 18-19 novembre 1973.
- Kateb, Kamel. *Européens, «Indigènes» et Juifs en Algérie (1830-1962)*, L'institut nationale d'études démographiques, 2001.
- Lewis, Bernard. *Juifs en terre d'Islam*, traduit de l'anglais par Jacqueline Carnaud, Flammarion, 1986.
- Macias, Enrico. *Non, je n'ai pas oublié*, Robert Laffont, 1982.
- Memmi, Albert. *La statue de sel*, édition revue et corrigée, 1953, Gallimard, 1966.
- . *Portrait du colonisé précédé de Portrait du colonisateur*, 1957, Gallimard, 1985.
- . *Juifs et Arabes*, Gallimard, 1974.
- . *Le pharaon*, Félin, 2001.
- . *Le nomade immobile*, Arlea, 2003.
- Moati, Nine. *Les belles de Tunis*, Seuil, 1983.
- Monde (Le)*, 27 novembre 1973.
- Nahum, André. *Feuilles d'Exil*, Café noir, 2005.
- . «Juifs tunisiens: faire la lumière», *Jeune Afrique l'intelligent*, n° 2313, 2005.
- Robequain, Michèle. «Jalons bio-bibliographiques», *Lire Albert Memmi: Déracinement, exil, identité*, éd. par David Ohana, Claude Sitbon et David Mendelson, Fata Morgana, 2002.
- Schwarzfuchs, Simon. *Les Juifs d'Algérie et la France*, Jérusalem: Institut Ben-Zvi, 1981.
- Zouari, Fawzia. «Comme un poisson dans l'eau», *Jeune Afrique l'intelligent*, n° 2168, 29 juillet - 4 août 2002.
- . «Nostalgie de la Tunisie ancienne», *Jeune Afrique l'intelligent*, n° 2311, 24-30 avril 2005.
- 井筒俊彦『イスラーム文化』、岩波文庫、1991年。
- 「解説」『コーラン』、1958年執筆、岩波文庫、2004年。
- 『コーラン (上)』、井筒俊彦訳、岩波文庫、2004年。
- 田所光男「シヨアー後のフランスに生きる東欧ユダヤ移民のアイデンティティー革命家ピエール・ゴールドマンと歌手ジャン＝ジャック・ゴールドマン」『敍説』第Ⅱ巻第3号、花書院、2002年。